

こころを育む総合フォーラム

からの提言



こころを育む総合フォーラム からの提言

はじめに

「何んとかならないものだろうか。」多くのこころある日本人がそう思いはじめているのではないか。このこころ、想像を絶する残虐な事件、組織の不祥事、カネ目的の恥ずべき振る舞い、人として守りたいマナーの欠落など、目を塞ぎ耳を覆いたくなるような出来事が次々に起きている。

この豊かさを得て、この自然に恵まれ、このよき伝統文化を誇り、国民の高い資質と努力によって形成されてきた社会で、どうしてこのようなことになるのか。少しでも人が自らを制御し、他者への思いやりをもって生きようになれないものか。

では、どうしたらいいのか。この問題の根は深く、解決の方法は単純ではなく、特効薬があるわけでもない。そこで、同じ問題意識をお持ちの学界、経済界など各界の第一線で活躍中の代表的な方々にお集まりをいただき、宗教学者山折哲雄先生に座長をお願いして、総勢十六人で議論をはじめた。会の名は「こころを育む総合フォーラム」と名付けた。さまざまな分野の専門家の協力もいただき、事務局は松下教育研究財団があい務めた。

手探りながら会を重ねて、このたび提言をまとめることができた。この会は民間の立場から、これからの日本人がよりよく生きるために、メンバー自身も含め一人一人がどうあったらいいのか、どう行動したらいいのかを問うてみた。

この提言をご覧いただき、家庭、学校、地域社会、企業、メディアなどさまざまな立場の大人が、なんらかの活動をはじめの契機としていただければ幸いである。今後フォーラムとしてはそうした運動を支援する活動もして参りたい。

平成十九年一月十七日
財団法人 松下教育研究財団
理事長 遠山 敦子

目 次

一、はじめに	2
二、序 文	6
三、本 文	10
家庭という場所を見なおそう	11
◆家庭での育みを見なおすための七つの問い◆	13
学校という場所を見なおそう	14
◆学校での育みを見なおすための七つの問い◆	16
人びとのつながり	
―地域にできること、地域がしなければならないこと―	18
◆地域社会における育みを考えるための七つの問い◆	19
現代における「育む」を考えるとときのいくつかのポイント	21
◆ 企業・メディアによる育み支援を 考えるための七つの問い◆	23
まとめ	25
四、メンバーからのメッセージ	26
五、フォーラムの設立から提言まで	43

こころを育む総合フォーラムメンバー（平成19年1月 現在）

（氏名）（現職）

安西 祐一郎	慶應義塾 塾長
石井 幹子	(株)石井幹子デザイン事務所 主宰
葛西 敬之	東海旅客鉄道(株) 会長
金澤 一郎	国立精神・神経センター 総長
佐々木 毅	学習院大学 教授
滝鼻 卓雄	読売新聞東京本社 社長
張 富士夫	トヨタ自動車(株) 会長
遠山 敦子	松下教育研究財団 理事長
永井 多恵子	日本放送協会 副会長
中村 邦夫	松下電器産業(株) 会長
中村 桂子	JT生命誌研究館 館長
野依 良治	理化学研究所 理事長
本田 和子	お茶の水女子大学 名誉教授
三村 明夫	新日本製鐵(株) 社長
山折 哲雄	国際日本文化研究センター 名誉教授
鷺田 清一	大阪大学 副学長

（50音順、敬称略）



メンバー会議(月1回実施)



シンポジウム(東京・京都で開催)

序 文

序 文

われわれ十六名は、気持を新たにして朝早く集り、自由に語り合うことから仕事を始めました。

考えていること、思い悩んでいるところを率直に、遠慮なくぶつけ合う、全員がそんな覚悟を抱いて出発したのです。それぞれの意見が並び立ち、衝突しました。うなずき合うこともあれば、火花を散らしたままじっと向き合う、そんな場面もありました。

それが、この「こころを育む総合フォーラム」を立ち上げたときの最初の光景でした。初心に返って語り合おう、そういう気持がどの顔の表情にもにじみ出ていたように思います。

われわれの社会は、豊かな生活を享受することができるようになって随分と時間が経ちました。第二次世界大戦後六〇年です。けれどもその間、われわれははたして真に心の平安を手にすることができたでしょうか。子どもたちの心に、希望にみちた国の姿を刻みつけることができたでしょうか。われわれはもしかすると、もっとも大切なものを見失ってきたのかもしれない。つぎの世代に伝えるべき重要な遺産をどこかに置き忘れてきたのかもしれない。そうした疑問と反省が、話し合いをつづける過程で、つぎからつぎへとわれわれの胸元につき上げてきました。

家庭や教育現場における人間関係の乱れ、公的機関や企業における不祥事、そして心の凍りつくような残酷な事件の発生など、いずれも日本人の精神の衰退、かつて日本人がもっていたはずの倫理性の喪失を示す兆候ではないでしょうか。われわれはこれまでたしかに「物質的な豊かさ」という光の部分を手にしてきました。しかしふり返ってみると、いつのまにかその影の部分ともいえるべき「心の世界の空洞化」という、危機的な状況に追い込まれてしまっているというほかはありません。議論を重ねていくうちに、われわれの関心はどうしてもそのような方向にしばられていきました。

なぜ、そのようなことになったのか。もちろん原因は、いろいろに考えられるでしょう。われわれの間でも意見はしばしば行き違い、多方面に展開するようになりました。けれどもそのなかで、第一に見過ごすことのできないのがやはり教育の問題だったのではないかと、ということになりました。

戦後の教育の歩みをふり返るとわかりますが、そこではつねに知識の習得に力点がおかれ、科学技術と経済社会の進展を重視する方策がとられてきました。むろんそのこと自体は当然の選択でした。しかしよくよく考えてみると、そのために文化、芸術、そして宗教などの分野が周縁的な扱いしかうけてこなかったということはやはり否定することができないと思うのです。その結果、人間の精神性と倫理感を育む教育がおろそかにされてきたのではないのでしょうか。このような反省に立つとき、われわれは今こそ自立と創造を目指す「真の知力」の重視という旗を掲げるとともに、もう一つの欠かすことのできない目標として「こころを育む」環境づくりを前面に押し出し、その実現のためわれわれの知恵と努力を結集すべき段階にきていると考えるにいたったのであります。その場合、科学技術そのもののあり方を再検討することも必要かもしれません。

思いやりのある日本人
恥を知る日本人
美しい日本人

そしてまた
凛とした人間
品位ある人間
誇りと志のある人間

語り合いながら、討議を重ねながら、それぞれのメンバーの脳裏に点滅していたイメージはさまざまだったと思います。そしてまたそのようなイメージや理念の花束に寄せる期待や声援の声は、時にふれ折にふれ、この日本列島のいろいろな方面からきこえていました。われわれの耳元で、いつも鳴りひびいていました。

しかし、われわれは考え直したのです。まず、われわれ自身の足元をみつめるところから出発しよう、と。理念やイメージを思い描く前に、現実の生活場面に目を注ぎ、今すぐにでも実行できる日常の事柄を整理し、問題点を引き出そうと考えたのです。誰にでも納得できる実践的な課題は何か、ということでした。そのようにして最終的に探りあてた課題が以下に掲げる三ヶ条ということになったのです。こころを育むための三つの基準、すなわち「心の作法」と呼んでもいいような三種類の指標があります。整理の仕方、表現の方法には、もっと工夫すべきところ、検討を加えるべきところがあることはいうまでもありませんが、ひとまずここに掲げさせていただくことにいたします。

一、「殺すなかれ、盗むなかれ、偽るなかれ」——今日ではあまりいわれなくなった言葉です。この言葉は知られておりますように、時代、民族、宗教を超えて人としてもちつづけるべき規範として語られてきました。しかし残念ながら人類の歴史は、この黄金律がつねに裏切られつづけてきたことを同時に教えています。人間に課せられたつらいジレンマであります。そのことを今日、われわれはどのようにわが身に引き寄せて考えたらいいのか、どのように噛みしめたらよいか、という問題であります。早急には結論の出ない永遠のテーマかもしれませんが、「こころを育む」という課題を考えていく上では、やはり最重要の道標として掲げておくべきことではないでしょうか。

二、人間が人間らしさをとりもどすためのごく普通の生活を大切にし、これを習慣化していくということです。日常茶飯という言葉がありますが、食事の摂り方から身の廻りの整理、整頓まで心くばり、労働と休息と慰安をめぐる生活上のリズムを回復する、ということでもあります。物質的に恵まれた社会はわれわれの貴重な成果、社会的遺産として大事にしなければならないと思います。しかしこれからは同時にシンプルで、自然なライフスタイルを維持することが「心の作法」づくりにはさらに必要になってくるのではないのでしょうか。最近の標語をかりていいますと、「食育」の奨励や、「早寝早起き朝ご飯」運動などがそれにあたるでしょう。「小さな親切」運動なども人間が人間らしさをとりもどすための、もっともシンプルで、しかも根本的な生活態度ではないかと思うのです。

三、右の日常茶飯のライフスタイルが定まるとき、社会や他人とのつき合い方がさらに広がりを見せ、深まっていくのではないのでしょうか。家族や友人たちとのかかわりの大切さが意識されるようになり、愛と信頼の関係が生まれてくるはずです。自然に親しみ、自然から学ぶ楽しさが全身にみちあふれてくるのではありませんか。どのようなものであれ生命を大切に^{いのち}し、他者を傷つけてはならないという覚悟が養われるでしょう。公共のものを大切にし、人のため世のためすこしでも自分を役立てようとする気持も芽生えてくると思うのです。

そして、そのようにしてわが身をふり返るとき、長い歴史のなかで培われてきた日本人の「こころ」の姿や価値観がよみがえってくるはずです。勤勉、質素、「足るを知る」などの言葉に示されている考え方がそれでありますが、同時にこの日本列島が育んできた美意識や自然観、死生観、そして人間相互を結びつける社会性までが新鮮な息吹きをわれわれにとどけてくれるようになるのではないのでしょうか。

以上、人間に課せられてきた規範、ライフスタイル、そして生きるための知恵(価値観)、という三点にしぼってこの「提言」の骨子をまとめてみたのでありますが、じつはその討議の過程からまとめの段階にかけてわれわれの念頭から去らなかつた考え方の指針のようなものが二つありました。それを最後に申し上げさせていただきたいと思ひます。

第一、このたび「こころを育む総合フォーラム」を立ち上げましたのは、それが何よりもわれわれ自身の内心にむかって問いかける試みだったということです。このようなことはまずわれわれ自身の問題として考え、そして実践していかなければそもそもやるべきではない、というのがメンバー全員の一致した気持でした。それがあってはじめて、子どもたちとのあいだに希望の通路を開くことができる、

———そういうわれわれの呼びかけの試みであり姿勢であります。

第二、この「提言」は基本的にはいま申しましたように、若い世代へのメッセージとして発想されたものです。しかし本当のところをいいますと、むしろ大人の社会にむかって呼びかけるべき事柄ではないのか、というのがわれわれの率直な思いでもありました。今日における子どもたちの問題は、本質的にはわれわれ大人の問題ではないのかと考えつつけてきたからです。大人社会の価値観が揺らぐとき、子ども社会の乱れが発生する。子どもたちの運命がもしも悲劇的であるとするならば、それは大人社会の状況が悲劇の淵に沈みかけているからではないか、そういう反省にもとづいてこの「フォーラム」の会合を重ねてきたのであります。

以上がこの「提言」の骨子であります。それにしても、今日における大人社会の元気のなさ、自信喪失のありさまはどうしたことでしょう。抛るべき価値観とモラルの道標を見失い、まさに混迷の度を深めているというほかはありません。とするならば、このような状態から脱却するため、われわれはあらためて歴史に学び、世界の諸変化をも見定めつつ総合的な視点に立ち、自己再建の方途を探るべきときにきているのではないのでしょうか。

このような課題にとり組むため、われわれはここに経済界、学界をはじめ民間における各方面の専門家の英知を結集し、何が解決のために緊急の問題であるかを明らかにしようと努めてまいりました。ここではそのわれわれの討議の結果をご報告するとともに、以下に記しますように、とくに「家庭」、「学校」、「地域」、「企業」、「社会」、という五つの分野へのメッセージという形で、より具体的な提案をさせていただきました。

またこれを契機として、家庭、学校、地域社会、企業、NPOなどにおかれましても、民間の力を全国的に展開されますようこの「こころを育む」国民運動にご参加いただきたいと、心から念願するものであります。そのためのご参考になればと、具体的なアクションプランについてのいくつかの資料を、最後に添付させていただきました。

以上、われわれのこのような意図をどうかおみとりいただき、この「こころを育む総合フォーラム」からの提言にご理解とご協力をいただきたく、心からお願い申し上げる次第であります。

本

文

本文

家庭という場所を見なおそう

● 子育てはみんなの手で

核家族が中心になったいまの家庭には、子育ての手が足りません。これは現実です。けれども、もともと子どもはだれかが独りで育てるものではありません。

次の世代を育てるのは、社会のみんなの責任です。自分の子どもだけでなく、すべての子どもを健やかに育てる義務が、大人であるわたしたち一人ひとりにあります。その意味では、育児や教育を、母親とか教師とか、だれか一人の手、一つの機関に委ねたままにしておくのではなく、社会のだれもがそれぞれの立場でその「育み」に参加すべきです。

人を育むというとき、大人が大切だと思ふことを子どもに教えることが基本ですが、子どもたちには、大人がわざわざ教えなくても、大人を見て勝手に学ぶというところがあります。だから、大人を見て、そして大人に見守られて、子どもが「自然に育つ」ような場が家庭のうち、社会の内にきちんとなっていること、これが「育み」の本来あるべき形です。

子どもを「育む」というとき、そこには、子どもを伸ばす(そのためには子どもの思いによく耳を澄ます)という面と、子どもをしつける、生活の基本的な習慣を身につけさせる(そのためには「我慢」や「辛抱」をすること教える)という面とがあります。子どもはこのように、受け容れられ、また諭される、そんな「育み」のなかで成長していきます。その過程で、子どもたちはいろいろな困難にぶつかり、ときに悲鳴をあげもします。大人は、子どもがそのような困難にぶつかったときにそれをどう乗り越えるかも教えなければならぬし、また、子どもが悲鳴をあげたときには子どもたちの発するそうした無言の危険信号に敏感でなければなりません。

● 大事にされているという体験、それが信頼の基礎

家庭での「育み」は人生のすべての出発点になるものであり、「手塩にかけて」子どもを育むその重要さは他と比較しえないほどです。

子どもは生まれてすぐに親を中心とする家族のなかで育ちます。食べること、排泄すること、眠ることをはじめ、生き物として生きることの基本をここで身につけます。また、他人との話し方、つきあい方、他人の間での身ぶり、身ごなしなどの基本もここで身につけます。そしてなによりも、物事の理解の仕方、あるいは感じ方の基本を、ここで学びます。親やまわりの人たちが幼児のふるまいに、えらく大げさな表情や身ぶりで応じるのも、喜怒哀楽、慈しみや怒りといった自分の感情の理解の仕方、表現の仕方、さらにはそれらの抑制の仕方を覚えさせようとしているからです。このように、親(保護者)は文字どおり子どもの鏡になって子どものこころを創っているのです。そのことの重大さを親はしっかり自覚する必要があります。この点で、子どもを育むにあたって親の責任はたいへんに重いものです。

子どもが生きるうえで必要なさまざまのことを覚え、身につけるその前提となるのは、それを覚えさせ、それを身につけさせようとする両親もしくはまわりの人たちに、子どもが深い信頼と安心の情を抱いているということです。この深い信頼と安心は、生まれた直後から、いや生まれる前から、たっぷり愛情かけて大事にされてきたという体験から生まれます。まわりの人にことごとくこまやかに応対してもらった、手厚く世話してもらったという体験が、「しつけ」の前提となる他者への信頼感を根づかせるのです。将来、子どもが自分自身に対して深い自尊心(自分を粗末にしないこころ)をもち、他者へのこまやかな想像力をもちうるようになるのも、このような、他人によって自分が大事にされてきた、大切に扱われてきたという体験が、こころに深く刻まれてのことなのです。言うまでもなく、わたしたちの社会生活の基本、つまり「倫理」や「道徳」も、この自尊心と他の人

への想像力が根底になければなりません。

● 子育てにもっと高い社会的評価を

もちろん、育児はけっして楽なものではありません。育てるほうがいろいろ辛抱し、神経をすり減らさなければなりません。子どもが成長するにつれて負担はいつそう増えていきます。それでも、子どもはなかなか大人の思いどおりに育ってはいけません。が、まさに思いどおりにはならないこと、それこそが子育てのおもしろさであることも忘れてはなりません。子どもがどんな子どもになるか、それを楽しみに待つのも、子育ての喜びの一つなのです。子育てはたしかに苦しい。が、その苦しいことを避けるのではなく、苦しいことを乗り越えることをおもしろいと思えてはじめて、やりがいも出てくるものです。これは仕事や社会活動一般についても言えることです。

家庭での「育み」というのは、このように子どもの感情の芽、自尊心や他人への思いやりの芽を育てるということです。それがあってはじめて、我慢すべきところは我慢し、辛抱すべきことは辛抱し、また、他人のいやがることはしない、弱い人には優しくするという、社会生活の基本をその根っこのところで育むことができます。

子育ては、子どもの人生にとってこれほど重要なものであるわけですから、子育てはもっともって社会的に高く評価されるべきでしょう。

● 母親を孤立させないための仕組みを

子育てはけっして母親だけが担うべきものではありません。父親の役割も欠かせないし、家族をはじめとするまわりの人間も、子育てをともに担う必要があります。子育ての責任を母親が中心となって担う場合も、その母親への厚い支援が必要です。そのためには母親を孤立させない仕組み、女性が職業と育児を安心して両立させうるような仕組みが、その周辺にさまざまなかたちで完備されている必要があります。子どもはみんな育てるものだということが、考え方のみならず仕組みとして整備されていることが、子育ての中身を厚くするのです。

子育てへの、そのような厚い社会的援助があつてこそ、親は子どもを口やかましく包囲することもなく、子どもをのびのび育てることができます。子どもが自然にいろいろなことを身をもって体験することができる、そのような機会をたっぷり用意することができます。けれども実際には、そうした子育ての背後に厚い社会的援助の仕組みが十分がないので、親は子育てを余裕をもっておこなうことができず、思いどおりにならないと焦って、つい子どもに過剰な干渉をし、過剰な期待を押しつけてしまいます。

● 子育てを楽しみと感ぜられる環境を

子育ては子どもの一部始終を細かく見守り、育む大切な務めですから、特定のだれかが責任をもってそれに当たらなければなりません。けれども、断じて人が独りで担うべきものではありません。ここには、お年寄りから近隣の大人たちまで、少年年長の者からときには年少の者まで、さまざまな人が合流し、支援し、またその声が届くようにしておかなければなりません。家族の姿はたしかに多様に変貌してきていますが、どのような家族であっても、父母の不和、家族のあいだの^{あらそ}諍いが絶えなければ、子どもはすくすく育つものではありません。そのような不和や諍いはときに子どもの虐待にもつながり、それが子どもに、将来にわたって計り知れない傷を残してしまひもします。

子育ては、円満な家族関係、そしてまわりのきちんとしたサポート体制がなければ、それを担う者にとってあまりにも重荷になってしまいます。子育ては本来楽しいものだどだれもが感ぜられるような環境をつくるのが、いまはとくに大切です。

◆ 家庭での育みを見なおすための七つの問い ◆

- ① 幼い子どもに、親(保護者)は、たっぷりと愛情をそそいでいるだろうか？
 - ・抱きしめ、手をかけ、話しかける、そのような厚いコミュニケーションを図っているか？
 - ・その上で、よいこと、わるいことのけじめを、きちんと身につけさせているか？
- ② 子どものよい点をしっかり誉めて、自信をもたせているだろうか？
 - ・親や他人に認められ、大切にされてはじめて、子どもたちは自分を肯定できるようになるが、親は子どもを大事に思っていることを、子どもたちにきちんと伝えているか？
 - ・子どもがやったよいことを、その都度きちんと誉めているか？
 - ・子どもの発する信号を見逃さず、いつでも家族全体で話しあえる雰囲気になっているか？
- ③ 子育ての不安、ストレスへの対応は、家族、親戚、近隣、保育所などでともに担われているだろうか？
 - ・子育ては、夫婦、家族が協力しておこなうもの、そのことを父親は理解し、ちゃんと手伝っているか？
 - ・子育ての悩みをいつでも相談できるしくみを地域社会はつくっているか？
- ④ 子育ては苦労もあるが、幼いいのちを育む喜びと楽しみがあるということが、きちんと認識されているだろうか？
 - ・母親たちをいたわり尊敬する姿勢を、社会全体がもっているか？
 - ・母親たちがほっと気分転換できる機会がきちんとあるか？
- ⑤ 親(保護者)の姿勢が、子どものころを創っているという自覚があるだろうか？
 - ・両親や家族の間に不和があると、子どものころにいびつな圧迫がかかるが、そのことを家族はきちんと分かっているか？
 - ・児童虐待や妻への暴力は、連鎖して、やがて子どもたちを加害者にしてしまう可能性があるが、そのことを認識しているか？
 - ・親(保護者)は、学校に対して何でもかんでも要求する前に、わが子へのしつけの責任を省みているか？
- ⑥ 家庭で、子どものころからよい生活習慣を身につけさせているだろうか？
 - ・一日一回家族でいっしょにご飯を食べているか？
 - ・個室化、携帯電話、TVゲームなどで、家族がばらばらになっていないか？
 - ・幼いときに読み聞かせ、本を通じて他人の人生とその悩みや克服についてきちんと伝えているか？
- ⑦ 子どもは社会のみんなが育てるもの、家庭はそのなかでもっとも重要なものだと認識しているだろうか？
 - ・だれが保育を担うかを、保護者たちが実情に合わせてみずからの責任できちんと決めているか？
 - ・保育所に子どもをあずけていても、親と家族という時間に子どもにたっぷり接触しているか？

学校という場所を見なおそう

● 学校は社会性を身につける場所

学校は子どもが自分とその家族以外の人とはじめて深く交わる場所です。その意味で、子どもにとってはじめての「社会」です。ここで子どもは、社会性を身につけ、他者と共存する作法を学びます。ここで子どもは、他人を思いやる、あるいは他人の立場に身を置くという、社会的な「倫理」や「ルール」の基本となる資質を身につけていきます。

学校は子どもにしっかりとした学力や真の知恵を身につけさせるのが第一の使命ではありますが、人とのかかわりのあり方の基本をきちんと身につけさせることも、もう一つの大事な役割なのです。

具体的に言いますと、子どもは学校で、親密でない人、たがいによく見知っていない人との対人関係の基本を学びます。挨拶やお礼の言い方、他人への親切、弱い者への慈しみと援助、そして謙虚ということを学びます。他人と話しあい、たがいに納得してものごとを決めていく能力、責任の取り方を身につけます。生きるための基礎能力、生きることの支えとなるような知恵や知識を身につけます。異なる年齢の人とも交わることで、集団における縦横の関係を編んでいく力、つまりは組織をつくっていく力を身につけていきます。

ところが、学校という空間はいま、そのようなものとして十分にうまく機能していません。むしろ、「いじめ」とか「学級崩壊」とか「コミュニケーション不全」というように、マイナスの面ばかりがめだっています。

● ともに力を合わせて学校をつくるという態度を

むかしの子ども社会は、年齢別に輪切りにされて生活するのではなく、年上の子どもが年少者の世話を焼くことが多かった。子どもたちは、いまのように親からおもちゃを買ってもらうのではなく、自分たちで考えだした遊びや慣行をくりかえしていた。そこにはつまり「小児の自治」とでも言うべきものがあつた。また、子どもたちは大人のまねをすることに熱心であつた。大人たちのほうも「遠からず彼らにもやらせることだから、見せておこう」と、仕事に没頭している姿、祭や遊びに夢中になっている姿を子どもに対して隠さなかつた……。

『こども風土記』で柳田國男はこのように書いていました。戦後しばらくも、そういう子ども社会は続きました。

高度成長期あたりから、子どもはおもちゃを存分に買い与えられ、子ども部屋もあてがわれるようになりました。やがて、高校進学もあたりまえになり、子どもたちの群れは、大人たちのあいだ、大人たちの声の届くところで生活するというよりも、学校という閉じた空間で一日の大半の時間を過ごすようになりました。そして、本来家族による子育てにおいて解決すべき問題をもふくめ、子どもにかかわるさまざまな問題が学校という場所に持ち込まれるようになりました。

教育のすべてを学校に任せると、当然、教師の責任が過重になります。責任が過重になると、責任問題が発生しないような工夫を、教育そのものよりも先にやってしまうことになります。そうすると、教師の言葉はつききれいな事や建前になってしまい、言葉は子どものころにますます届きにくくなってしまいます。

教育のすべてを学校に任せると、保護者のほうも、教師といっしょに学校をつくるというより、学校に何かを要求するという姿勢が強まってきます。それで、教師のほうも「保護者が怖い」「生徒が怖い」と、まるで腫れ物にさわるといふようになります。教師と保護者の信頼関係は、かつてPTAが学校のサポーターとしてあつたころと比べ、あきらかに崩れてきています。この両者が責任を問ひあう構図を、ともに力を合わせて学校をつくるという関係に変える必要があります。そうでなければ、傷つくことは避けるばかりで、痛い思いをして覚えるという、教育であつたことにならなくなつてしまいます。「可愛い子には旅をさせよ」という古の教訓が、ますます活かされなくなつてしまいます。

● 「いじめ」をめぐる

いま頻発している「いじめ」も、子どもたちの生きる空間が閉じていることから起こっていると考えられます。大人でもそうですが、閉じた集団では、自由な関係よりも、むきだしの序列づけや排除や差別が起こりがちです。「いじめ」も、出口や逃げ場所のない、閉じた集団のなかで起こります。これを防ぐには、子どもの集団にもきちんと外の風が入るようにしておかなければなりません。子どもたちの集団に、教師が、あるいは地域がかかわっていく、そういう隙間を開いておく必要があります。

「いじめ」については教師ばかりがいったいいままで何をしてきたのかと責められています。親もまたなぜ気づかなかったのか、聞きたいところです。「いじめ」をめぐるのはさらに、メディアにも問題があります。「いじめ」をめぐる報道では、メディアと視聴者とが一体となって、学校への糾弾をまさに学校での「いじめ」と同じ構図でおこなっているように見えてなりません。

メディアによる教師への激しい糾弾に唱和するわたしたち視聴者の立つ位置は、「いじめ」を見て見ぬふりをする級友や教師が立つ位置と、ほとんど同じです。このように学校を窮地に追いつめるやり方では、「いじめ」の問題は解決しません。実際、スキャンダル報道や、テレビのバラエティ番組で仲間をいびるタレントたちの悪ふざけが、どれほど子どもたちのあいだの「いじめ」を煽っているかと考えると、こころが寒くなります。

閉じられた場所で異なる人間がむきだしで接するとき、そこには確執や悲劇が起こりがちです。だからそこには、相手への思いやりとか、礼儀とか、つきあいの作法といったクッションが必要になるのです。それらを育むことが、学校の、知識を伝えることと同じくらいに重要な使命であることを、教師もまわりから学校を支えるべき人たちも忘れてはなりません。そして大事なことは、教師や親たちは特定の子をひどく追いつめるような「いじめ」は決して許さない、「いじめ」を受けている子に対してはいつでも味方になるという強いメッセージを全ての子どもたちに伝える責任があります。

● 学校をもっと開いていこう

学校という場所は、社会の歪みがじかにどんどん入り込んでくることから子どもを守るということ、つまり子どもの世界の防壁となるという意味で、ある程度閉じていなくてはなりません。また、「学校」という場所は、子どもたちが「人としてどうしてもしなければならないこと」と「人としてぜったいしてはならないこと」を学ぶ場所であるとともに、社会の荒波にじかにまられるのではなく、それから距離をとって社会のあるべき姿、まちがった姿をきちんと区別し、社会を改善していく力を養う場所でもあります。だから、学校は社会から一定の距離を置いていなくてはなりません。

けれども、だからといって、学校を内に閉じた場所にしてはなりません。その理由は、これまで何度も述べてきたように、「育み」は親や教師に任せきりにすべきものではなく、社会のみんなが担っていかなければならないものだからです。

「育み」には、芽を植えつけるという面だけでなく、芽が育つのを見守るという面があります。子どもの悲鳴に耳を傾けるための仕組みのみならず、教師の悲鳴にも耳を傾けるための仕組みが、学校には必要です。悲鳴をあげればだれかがちゃんと対応してくれる、相談の窓口のような、そういう仕組みが要るのです。学校と地域とがよく連携をとって、そういう環境をもっと整えていかなければなりません。

「学校」は、先なる世代が後なる世代に、生きるうえで大切なこと、社会を運営していくうえでもっとも基本的なことを伝える場です。ですから、建前だけでなく現実のありようもしっかり伝えなければなりません。教室には聞きやすい言葉だけでなく、聞きにくい言葉がもっと充満しているのです。本気で何かを伝えようと思えば、ときには聴きたくもないこともしっかり言わなければなりません。貴重な体験を積んできた大人が実感をこめて本気で話すとき、その思いは子どもたちの心にしみわたるのです。だから学校は、外部からいろいろな人を招き、そうした声を子どもたちにじかに伝えることもこれからはしなければなりません。

●社会の一人ひとりが人を育む気概を

教育とは、人びとが人として生きるうえでときには痛い思いをしながら編みだした、やむにやまれぬ智恵を世代から世代へと「伝える」ことです。教育のそうした原点に立ち返って、いま「学校」を問う必要があります。次世代に何を伝えたいのか、何を伝えなければならないのか、それを大人がおのれの胸に問うてみるからこそ、教育の第一歩ではないでしょうか。本気で伝えたいことを、大人がみずから再確認すること、一言でいえば、大人がきちんとした「教養」をもつこと、それが先ではないでしょうか。ものごとの軽重の判断がきちんとついているかどうか、それが一社会の「民度」を測る尺度なのです。教育を学校だけに任せず、社会の一人ひとりが、次世代を「育む」気概を、そして力を、もつともつべきなのです。

◆学校での育みを見なおすための七つの問い◆

- ①学校は、子どもたちにしっかりと学力を身につけさせ、先生や友人との関係をつうじて対人関係の基本を育てているだろうか？
 - ・学力の基礎基本を徹底し、学ぶこと、知ること、分かることの楽しさを身につけさせているか？
 - ・教師と生徒は、信頼と愛情のある関係をつくっているか？
 - ・子どもの世界の感性や言葉づかいが薄っぺらなものになっていることを見逃していないか？
- ②教師は、一人ひとりの子どもに自信をもたせる努力をしているだろうか？
 - ・子ども一人ひとりの長所に着目し、誉めて自信をつけさせる努力をしているか？
 - ・子どもに自分を表現する機会を与え、自分の能力や魅力を発見させているか？
 - ・教師の一言が、その子の人生を導く力をもつことを自覚して接しているか？
- ③学校では、道徳教育を魅力的で説得的なものにするよう、工夫をしているだろうか？
 - ・よい読み物を活用し、楽しみながら人としての価値、社会生活・集団生活での規範や規律をしっかり伝えているか？
 - ・ボランティア、体験学習などを通じ、他人のために働くことの大切さを身で覚える工夫をしているか？
 - ・道徳の時間ではどのように教えるのか、学校や学年全体で話し合い、適切な内容と効果的な方法を工夫し、実践しているか？ そのために必要な素材をきちんと用意しているか？
- ④道徳教育の時間だけでなく、学校全体で「こころを育む」という姿勢をとっているだろうか。
 - ・教師は、各教科でも、「こころを育む」ことを根底にもちながら教育にあたっているか？
 - ・教職員はつねに一致協力して事にあたっているか？ 教師は子どもに迎合的になりすぎているか？
 - ・学級活動、生徒会活動、部活動をはじめ、自然体験、奉仕活動、ほんものの芸術にふれる時間、体育祭や文化祭など全学年が参加する学校行事を積極的にとりいれているか？ それらを通じ、友人関係や公共心、忍耐や協力の大切さを身につける機会にしているか？
- ⑤学校では、「こころを育む」ための具体的なアクションをとっているだろうか？
 - ・挨拶、人への親切、清潔、生き物を飼い栽培すること、「早寝、早起き、朝ご飯」など、目に見える具体的な目標を決め(あるいは、子どもたちに決めさせ)、それを日常的に実践しているか？
 - ・給食や食事を「こころを育む」大切な機会ととらえているか？
 - ・「朝の読書」を推進しているか？ 読書の大切さを保護者にきちんと伝えているか？ また、学

校図書館を充実させるよう、行政はバックアップしているか？

⑥学校と親(保護者)とは、たがいの立場を尊重・理解し、協力しあう関係にあるだろうか？

・学校は、自分たちの考え方や教育方針を、保護者にしっかり伝えているか？

・「こころを育む」には、学校と家庭とが価値観を共有しつつ子どもに接することが大切であるが、そのために学校と保護者が話しあい、力を合わせているか？

・行政は、問題の起こっている学校に対し、指導者やサポーターの派遣など適切な対応をとっているか？ 保護者側のときに過大で不当な要求に呑み込まれないよう、学校側をしっかり支えているか？

⑦学校と地域の大人たちは、一致協力して、子どもたちの居場所、子どものための相談場所を設けているだろうか？

・放課後、学校を開放して、子どもたちが遊び、学べる場所をつくっているか？

行政はそのための手当てをしているか？

・学校や地域では、子どもたちの悩みや心配事を聴き、相談にのる場所と人を用意しているか？

・人生や仕事の豊かな経験をもつ地域の大人の協力を得て、生き方、考え方、感じ方について学校で語ってもらっているか？ シニアたちの出番を活用しているか？

行政はそうした試みをきちんとサポートしているか？

人びとのつながり

——地域にできること、地域がしなければならないこと

●子どもが自然に育つ場

いまの子どもは、家庭と学校と塾を往復するだけで、あるいは自分たちだけのたまり場にたむろするだけで、地域における「社会」の経験にたいへん乏しいのです。見知らぬ、あるいはちょっとだけ見知っている異世代の他人と個人的な会話をする機会も乏しいのです。子どもが「自然に育つ」ための条件は、家族や友だち以外の人との協調と葛藤の経験であるはずなのに、です。

かつての社会にはまだ、子どもが勝手に育つような「場」がありました。少し距離を置いて見守るようなまなざしが、地域社会には溢れていました。実際、子どもたちは近隣のひとに対して「おじさん」「おばさん」という擬似親戚用語を使っていました。言うまでもなく、こうした回りのまなざしは少年少女にはすこぶる鬱陶しいものではありません。が、子どもは、そういう視線にもまれ、護られ、抵抗もして、成長してきました。現代はそういう「自然に育つ」場所がきわめて少ないのです。その意味で、教育は社会の問題であり、大人の問題であると言えます。

●みんなで協同して事にあたる力を

子育てと教育の厚い背景であるべき地域社会が、いまその基礎体力を失ってきています。コミュニティの力というものがずいぶん削がれてきています。たがいに出自を大きく異にする人びとがたまたま同一地域に住まうことになり、マンションや公団住宅に住まうことで、各家族が内へと閉じてしまい、都市の商店街や露地のようにたがいに勝手に出入りできるような開放性が地域から消えていきました。食材も全国チェーンのマーケットで購入し、気候や災害との闘いも、建物の機能改善や自治体の公的対策に依存するようになり、住民が協同で事に当たるということが少なくなりました。ソーシャル・サービスの恩恵を受ける（あるいは、それを買う）ことで、身近な人の生老病死に協同してあたることが少なくなりました。それにともない、子どもたちもまた地域社会で十分にもまれることもないままに、それぞれの家庭から、そして学校から、いきなり公的空間へ、つまりは社会に出ます。いきなり本番、というわけです。

人びとは地域で暮らすうえで、生活の知恵を先達から学び、その遺産を受け継いできました。けれども、大震災のような非常時には、それらの大事な遺産そのものが壊れてしまいます。このとき人は、過去の人びとが一から積み上げてきた文化を、もういちど一から積み上げなおすことができなければなりません。そんなときでもしっかり生きていくためには、調理や洗濯、看護や介助まで、文化が瓦解したときも一から生を再建する能力を身につけておかねばならないのです。なのに、社会が豊かになって、人びとは生活を支えてくれるさまざまな社会システムや社会サービスに安心して乗っかり、そのことでそうした能力を逆にどんどん失ってきています。被災のときも災害のときもみなで協同して事にあたる能力を、子どものときから、地域をあげて鍛えておかないと、社会の崩壊に際して人はまったく無力となってしまいます。そんな無力さからは、よい社会を建設しようとする態度やエネルギーは生まれません。

●地域社会の新たな役割

子どもたちが将来、大きな被災や災害にあっても、さらにときとして家族のメンバーの失職や家族の崩壊に見舞われることになっても、それぞれに立ち直れる力を身につけるためには、地域社会の協力が欠かせません。人生についての、あるいは仕事についての深い経験のある地域の大人の知恵を、子どもたちにたっぷり注ぎ込む必要があります。また、年齢の異なる大人たちが協同してどんなふうに仕事をおこなっているか、大人たちがどんなことを

楽しみ、どんなことに苦しんでいるかを、子どもたちが小さいうちから見せておくことも必要です。

退職者や主婦、介護士やリハビリ療法士、環境NPOやアートNPOのメンバー、地域の企業人などといった多彩な人材を学校に招いて、大人たちが時間をかけて培った知恵を語り伝えること、これは地域社会の厚い協力なしにはありえません。子どもたちを地域社会の活動に参加させたり、職場体験や、地域の自然体験をさせたりすること、これも、各種のクラブやサークルをはじめ地域社会の広い協力なしにはありえません。子どもたちの「こころの育み」には、家庭や学校だけでなく、もっと開かれたかたちで地域社会が参画すべきです。子どもたちは、大人たちを見、大人たちのあいだで揉まれて、育っていくことを忘れてはなりません。

●子どもの視点に立ったまちづくりを

子どもを地域社会のなかですくすく育てるためには、大人たち一人ひとりが表になったり裏になったりして、みなで協同して子どもたちを育てる、そういう「育み」の仕組みを、いまの新しい地域社会のなかにつくりだすことが必要です。

そのためには、まちづくりを、大人の生活(労働と余暇)の視点からだけではなく、思いきって子どもの視点に立っておこなうくらいの覚悟が要ります。大人にとっては不便でしょうが、住宅街にはクルマは入れないことに決める、すると子どもは児童公園というもうひとつの閉じた場所に行かなくても、道ばたで大人たちとも行き交いしながら生活できることになります。大人たちが仕事をしているその真横で、その姿をちらちら見ながら「勝手に」育つことになります。このように、子どもたちが安心してのびのび暮らせる場所がまちに溢れることで、まちの光景はいっきよに変わります。

子どもの「育み」にもっと焦点をあてたコミュニティをどう組み立てるのか、都市計画のなかにもどのように子どもの視点を活かすかを、わたしたちはもっと真剣に考えなければなりません。そのなかで、トレーニングのために大人の「社会運営」にも一定程度参加させつつ、「市民性」の涵養^{かんよう}を試みなければなりません。

◆ 地域社会における育みを考えるための七つの問い ◆

- ①地域のだれもが、子どものこころを育むという姿勢で、子どもに接しているだろうか？
 - ・大人たちが地域の子どものたちに関心を持ち、触れあい見守る機会を十分にもっているか？
 - ・子どもたちが安全にのびのびと遊べる場所を地域につくっているか？
- ②地域として独自の役割を考え、学校とセットで、子どもたちの学習環境をつくっているだろうか？
 - ・学校とは違う環境で人とのつながりがもてる機会をつくっているか？
 - ・異質な他者(異年齢、他校の生徒、他の保護者、社会人など)とのかかわりの機会が十分にあるか？
- ③地域社会は、子どもたちが自立して力強く生きていく力を育てているだろうか？
 - ・地域のなかで子どもたちが自然に道徳や公共心を身につけるような取り組みをしているか？
 - 大人は子どもたちのよきモデルになっているか？
 - ・地域社会でどのような責任や役割を果たしたらいいのか、子どもたちが自分で考え、実行する機会をつくっているか？
- ④地域のなかに子どもたちの居場所をきちんと設けているだろうか？
 - ・地域のなかに子どもたちが、みずからの社会的役割を意識しながら、生き生きと暮らせる場所が十分にあるか？

・いざというとき、子どもたちが相談できる仕組みや窓口を設けているか？

⑤地域教育プログラムの充実と活性化を図っているだろうか？

・地域の大人の職業生活、市民生活、文化生活を学ぶために、充実した教育プログラムを用意できているか？

・地元での自然体験などを企画し、実施しているか？ すぐれた芸術やスポーツ活動、伝統行事にふれる機会が十分にあるか？

⑥地域活動への参加を子どもたちに促すための施策を実施しているだろうか？

・子ども会、自治会活動への参加を呼びかけているか？

・環境、福祉などのボランティア活動への参加を呼びかけているか？

・お祭りなどの伝統行事の存続に努力し、それへの参加を呼びかけているか？

⑦子どもたちの視点に立ったまちづくりをしているだろうか？

・思い切って、子どもたちの意見や願いを聴き、子どもたちの視点に立ったまちづくりを始めてはどうか？

現代における「育み」を考えるとときのいくつかのポイント

●文化としての「育み」

学校制度は明治時代に入って、「国民の育成」という近代の社会的要請のなかで設置されたものです。けれども、次世代を担う子どもたちを教え、育むという意味での「育み」、つまり子育てと教育は、学校という制度ができてから始まったわけではありません。「子育て・教育」は国家的な制度であるよりも先に、まずは文化(カルチャー)としてありました。学校制度よりさらに古くから試行錯誤をくりかえしながら培ってきた過去の「育み」に学びつつも、わたしたちは、現代社会にふさわしい「育み」(次世代育成)の文化を全員で創りだしていかなければなりません。それは、この社会のだれもが引き受け、担っていかなければならない課題なのです。

●思いどおりにならないこと

現代社会では、多くの人が、「自由」を「物事が思いどおりになること」とはき違えているように見えてしかたがありません。けれども人間には、人としてどうしても超えられない限界というものがあります。飲む物、食べる物がなければ生きていけない、重い病気にかかれば生きていけないというのもそうした限界の一つでしょうが、なによりも人間は一人では生きていけないものです。他人の助けなしには、一日の食事一つまかなえないものなのです。社会のさまざまなシステムによるサービスを購入する金さえあれば何でも自由になると考える人がいるようですが、このシステムがいったん崩れたら、人はたちまち生き延びることそのことの限界にぶち当たってしまいます。人間は偉大な文化を創ってききましたが、その一方で、独りでは何もできない無力な弱い存在であり続けています。実際、人は自分の身一つ、自由にできない存在なのです。

いつも人としての限界を知っておくことは重要です。どうしても思いどおりにならないものがあることを肝に銘じておくことが必要です。その限界を肝に銘じておこうと、人類は古くから、(人間の力ではつくれない)生命の重みを教え、あるいは足を知ること(質素)、物を大事にすること(節約)、他者を尊重することの重要性を説いてきました。「子育て・教育」の場では、これらのことをまず子どもたちに伝えなければなりません。社会生活においては、人が享受する「自由」にはかならず「責任」がともない、人が行使する「権利」にはかならず「義務」がともなうのです。そのことを大人自身が肝に銘じ、子どもにもしっかり教えていないからこそ、わたしたちの社会は自分勝手なふるまいが目につく社会になっているのです。

同じことは、自然との関係においても言えます。子育てと同じで、生き物や自然環境というのは人間の思いどおりになるものではありません。自然には自然の^{ならい}というものがあります。それを尊重すれば、自然はわたしたちに大きな恵みを与えてくれます。わたしたちに美しい姿を見せてくれます。が、それを無視してしまえば、大きなしっぺ返しをくらいます。そのことをわたしたちは自然とのつきあいを通して、深く学ばなければなりません。この経験も、子育て・教育に活かさなければなりません。

●子どもたちを^{さいな}苛む(わたし)への問い

現代社会は多くの人が「アイデンティティ」への問いに、大なり小なり^{さいな}苛まれています。「自分はいったい何者なのか」「わたしは何のためにここにいるのだろうか」といった問いです。

このような問いは、「近代社会」に固有なものです。「近代社会」は、個人をその^{しゅつじ}出自において測らない、つまりどんな家族、どんな職業、どんな階層の出であっても、どの性であっても、それら出自にかかわらず、個人をみな等しく「一」と考える、そのような理念でつくられている社会です。だれもが

等しく教育を受け、等しく「一票」をもち、自由に自分の生き方を決める、そのような権利をもっている
とされる社会です。「自由」「民主」「平等」「人権」などの理念もこのことと深く関連しています。

現代は、社会というものがあまりに大きく、複雑なものになり、その前で人は個人としての無力をよりリアルに感じがちです。社会という大きなシステムの歯車の一つになるということは、それを担うのが別の人でもよいということです。つまり、業務にあたる人は、そもそもが資格と能力のある人であればだれでもよいわけで、いわば取りかえ可能な存在とみなされているということです。そこで、「この仕事をするのは本当にわたしでなければならないのか」という問いが、各人のなかに忍び込んでくることとなります。「近代社会」はこのように、各人が自己のアイデンティティへの問いに苛まれる社会でもあるのです。十代の人たちが抱え込んでいる「迷い」や「焦り」や「無気力」は、わたしたちの社会のこうしたあり方と切り離すことができません。けれども、そのなかで人がなすべきこと、取り組んでみることがまだまだたくさんあり、一人の人間が真剣に取り組めば達成できることもとても大きいことに、ぜひ気づいてほしいのです。

子どもたちがそうした鬱^{ふさいだ}いだ状態からもっと広々とした場所へと出ることができるように、わたしたちは、この世界は子どもたちが想像しているよりももっと広いこと、そこには想像しているよりももっと多様な仕事や生き方があることを、しっかり伝えなければなりません。

●企業も地域における子どもたちの「育み」をともに担おう

企業も、わたしたちの社会をかたちづくる重要な組織のひとつとして、地域における子どもたちの「育み」に積極的に参加・連携していく使命を帯びています。なぜなら、企業もあきらかに地域における人びとの生活環境の一つだからです。立地しているその地域の生活環境に深くかかわっているからです。それになにより企業人は、同時に市民であり、生活者でもあります。その意味では、企業は「社員」教育のみならず、「市民」としての社員の教育にも取り組まなければなりません。社員が地域の「育み」にどう参加していくのか、それを企業もまた考えなければなりません。

職場のある地域のみならず、住まいのある地域での社員の「市民」としての活動についても、企業はこころをくばる必要があります。地域では社員は企業人としてではなく一市民として行動するので、企業が直接にかかわるわけではありませんが、社員が家族生活と地域生活のためにもっと時間を割けるような工夫をすることで、社員の市民としての活動を支援することが必要です。さらには、働く女性(男性)の育児支援もする必要があります。社員が「よき企業人」である前に「よき市民」となるような教育文化を、企業自身が育んでいくことも、社会的な存在としての企業の大切な使命です。

● 情報社会という環境

最後に、「情報社会」という、環境の大きな変化があります。

ITと呼ばれる現代の情報通信媒体は、わたしたちの生活や文化に、すぐには見えないほど深い影響をおよぼしてきました。文字の発明、印刷術や写真術の発明がそうであったように、この電子メディアの出現も、計り知れないほどの利点と、後になってようやく気づかれることとなったさまざまな弊害とを併せもっています。

ここにいて遠くのだれとでもつながることのできる便利な情報媒体をわたしたちは手に入れました。けれども、はたしてそれで世界は広がったのでしょうか。子どもまで携帯やインターネットを駆使できるようになったのに、皮肉なことにコミュニケーションはどんどん内向していきばかりです。交信相手は限られ、その限られた人と、不安に駆られたかのようにくりかえし交信しています。世界を開くはずのメディアが、世界をいよいよ小さく閉じてしまっています。

また、相手の様子、とくに顔色や姿勢、雰囲気や身ぶりなどへの臨機応変の対応とか、押しやり引いたりといった関係のやりとり、喧嘩や和解の作法、交渉や妥協といった折り合いのつけ方など、コミュニケーションの基本となることを、幼いうちに十分に習得しないまま成長すれば、成熟した社会性

は身につかないことでしょう。

個室のなかで電子ゲームに夢中になっているうち、子どもたちは(先に指摘した)「思いどおりにならない」のが現実だという感覚を失って、なんでも失敗すればリセットしたらいいという奇妙な感覚になじんでいきます。他人との押し合い、引き合いの体験を身をもってせずに、〈わたし〉のアイデンティティへのあの閉じた問いのなかに引きこもるようにもなります。

ちょっとやさそとでは挫けない、鬱がない、そういう強靱なところを育むには、情報環境に習熟させるよりも先に、まずは「思いどおりにはならない」ものの存在を体験するなかで、生きるうえでほんとうに大事なものを見つけさせること、他人に言うべきことは言い、譲歩することは譲歩するという社会性の体験を、くりかえしさせることが、何をおいても重要です。

◆企業・メディアによる育み支援を考えるための七つの問い◆

①企業は、その使命と役割を自覚した行動ができているだろうか？

- ・企業は、それ自体が社会的な存在であり、事業を通して人びとの生活と社会を豊かにする存在であるとの強い自覚の下に経営にあたっているか？
- ・企業は、個を活かし、多様性(性、年齢、国籍等)あふれる人材登用の仕組みをつくっているか？
- ・企業は、子育てのために、働く女性(男性)の育児支援などの仕組みや風土づくりに、積極的に取り組んでいるか？

②企業人は、みずからが同時に市民・生活者であることの自覚を十分にもっているだろうか？

- ・企業人は、家庭において、「働く」ことの意味と喜びを、自信をもって子どもたちに語り、伝えているか？
- ・企業は、社員の積極的な社会参加の支援活動と仕組みづくりをしているか？

③企業人一人ひとりが、同時に市民・生活者として、よりよい社会づくりに積極的に関与しているだろうか？

- ・企業人は、市民・生活者として、積極的に地域社会の活動に参加しているか？
- ・企業は子どもたちに、学びや仕事の意義と楽しさを伝える体験学習や職場体験の機会を十分に与えているか？

④企業みずからが、市民としての社員教育に積極的に取り組んでいるだろうか？

- ・「あいさつ運動」の推進や社会倫理の尊重、地域活動・ボランティア活動の奨励など、市民としての社員をサポートする具体的な教育活動をおこなっているか？
- ・企業は、社員が、よき市民・生活者として多くを「学ぶ」よう、積極的に後押ししているか？

⑤メディアは、子どもたちに学びや仕事の意義や楽しさを、きちんと伝えているだろうか？

- ・メディアは、子どもへの影響を十分に配慮して、制作・報道をおこなっているか？
- ・メディアは、子どもたちが夢をもてるような紙面づくり、番組づくりに、しっかり力を入れているか？

⑥メディアは、地域のすぐれた教育活動の事例を、進んで報道しているだろうか？

- ・メディアは、地域住民による、地味ではあるが大きな意味のある子育て・教育支援活動を、報道のなかで積極的に取り上げているか？
- ・自然環境とうまく共生している地域社会のさまざまなライフスタイルや取り組みを、時間をかけて

ていねいに紹介しているか？

⑦わたしたちの社会は、高度情報化社会が子どもたちの対人関係に与える影響を考えた対応をしているだろうか？

- ・子どもたちの情報機器の利用(インターネット、携帯電話、ゲーム等)が過剰になりすぎないように、心配りやルールづくりをしているか？
- ・高度情報化社会のメリット、デメリットを、広く社会的なテーマとして検討し、それに適切に対応できるよう具体的な運動につなげているか？

まとめ

いつの時代も、子どもは大人を見て育ちます。それに対して、現代の大人はきちんとした見本を示せているでしょうか。

新聞やテレビで、大人社会が引き起こす不祥事や事件が報道されない日はありません。また携帯電話の使用法をはじめとして、マナーの欠如、「公德心」の欠如は大人においてこそはなほだしいと言わざるをえないのが実情です。

たしかに、どの時代においても、人は人として完全ではありえません。そのなかで、失敗や挫折や後悔を繰り返しながら、それでも少なからぬ人がより「正しく」、より「美しく」、より「慈しみ深く」生きようとめざしてきたこともまた真実です。子どもたちには、大人のありのままの姿のみならず、それを超えようとしてきた姿をもしっかり見せるべきです。きれい事や建前だけの言葉は子どもにすぐに見抜かれますが、その一方で、「精進」や「努力」や「克己」を欠く行為は子どものころにはぜったい届きません。

そのために、広く世界に目を向けて、「いい大人だなあ」と大人自身が思える人びとを発見し、その生き方を伝えるよう努めましょう。地域のなかの人目にはつかないけれども心こもった地道な活動をしている人から、海外の恵まれない地域で献身的に働いている人まで、「輝く大人」「がんばっている大人」の姿をわたしたち自身が見つけ、それを子どもたちに伝えるよう努めましょう。言うまでもなく、それはわたしたち大人自身の育みでもあります。

そして同時に、自分に問うてみましょう。はたして、子どもが「まねをしたい」「あのようになりたい」と憧れる、そうした大人でありえているかどうか、と。子どもたちの「こころを育む」ためには、「こころを育む」ことの大切さをまずは大人自身が痛感しなければなりません。大人自身が、この時代、この社会のなかで生きるときの芯になるもの、軸になるものをみずから明確にしなければなりません。そうしてはじめて、人として生きるうえでの芯や軸、つまりは人として守るべき基本を、子どもたちに伝えることができるのです。

子どもたちのこの「こころの育み」のために、わたしたち一人ひとりにできることから始めましょう。わたしたち一人ひとりにできることを固めていきましょう。自分たちのあり方をしっかりふり返るとともに、子どもたちの「こころの育み」のために大人たちがすでにどこかで開始しているさまざまな取り組み、その明るい芽を発見しましょう。そして、それら地域やNPOのさまざまな運動と協力しながら、みんなで子どもたちのこころをのびやかに育めるよう励んでいきましょう。

メンバーからの メッセージ

メンバーからのメッセージ

安西 祐一郎



人は誰でも、一人ひとりがたくさんの多彩な能力をもってこの世に生まれてきます。一回かぎりの学校や就職によって、自分の能力のごく一部を使うだけで人生がすべて決まってしまう、そういう時代は過去のことになりました。これからは、「自分の底に隠れていた能力を自分で発見し、磨き、それによって他者に貢献し、生活の糧と生きる喜びを得る」、そういう時代がやってきます。

こうした時代には、私たち一人ひとりが希望と目標を持ち、知識を広め、それらをさまざまな感動の体験によって血肉にしていく、そういう意味での「独立して生きる力」を養うことが大切になります。

他方、地域や世代、民族や国家、宗教間の軋轢、また生命、安全、環境の問題など、これからの時代には、前の時代にも増して、人々の利害が直接からむ課題がたくさん現れてきます。こうした時代には、他者の痛みを感じ、他者の思考を理解し、自分の思いを伝えながら、信頼関係を見出していく「協力して生きる力」を、多くの体験を通して養うことが大切になります。

「独立して生きる力」と「協力して生きる力」を、さまざまな感動の体験を通して身につけていくことができる、そういうところを育むことが大事だと考えています。

石井 幹子



いま、日本ではさまざまな問題が起こっています。特に子供を巡っての痛ましい事件が、多くなっているもの事実です。「いじめ」や「虐待」、自分が生んだ子供を捨てる親や、親を殺害する子供など、かつてはあまり報道されなかった事件も増えています。昔はこんなことはなかったと云ってみたり、教育が悪かったと片づけてしまうことは簡単です。そんな状況を何とかしなくてはという危機感を持って集まった私たちは、真剣に討議を重ねてきました。内容については、「提言」に十分に盛り込まれています。

しかし、考えてみると、私たち自身が反省しなくてはならないことが沢山あります。こんな社会を創ってしまったのは、二十世紀後半を生きてきた私たち世代の責任ではないかということなのです。戦後の貧しかった日本は、何とか国が立ち直り、国民が日々食べて行くことが精一杯でした。産業を興し外国に輸出すること、欧米の文化文明をキャッチアップすることに明け暮れていました。それが経済最優先で効率本意の社会となってきたことは周知の通りです。

二十一世紀となって、日本の社会にも少しずつ変化の兆しが見えてきたような気がします。日本の良さを見つけよう、日本の文化を再認識しようといった日本再発見の動きや、田舎暮らしへの憧れやスローライフの提案といった環境志向などが、少しずつ浸透しはじめたのもその証ではないでしょうか。

家族を大切にしよう、一人一人の個性を大事にしよう、仕事以外の暮らしを楽しもうといった大人が増えて来ることが、子供の命を守り、こころを育んで行くことにつながると私は思っています。二十世紀前半から終わりにかけて、長い間壊してきたものをこれから時間をかけて修復し、時には解体して新しく創りなおすことをして行かなくてはなりません。

日本人は本来自然を尊び、人との調和をはかって生きてきました。明治以後、特に第二次世界大戦後の日本は異常な社会だったのかもしれませんが。二十一世紀には、日本の伝統や文化を継承しながら、世界の中での日本を視野に入れて、伸びやかで謙虚な社会を創って行くことが、美しく豊かなこころを育むことなのではないでしょうか。

葛西 敬之



人間の心は水である。水は「器」を得て初めて形をなし有用となる。「器」が失われれば時として制御不能となり、洪水となって災害をもたらす。人間のこころも同様であり、器が必要である。器の典型的な例を挙げれば家庭があり、地域社会があり、その根本は国家がある。器を作っている素材は形であり、それは生活習慣であったり、礼節であったり、集団の規律であったりする。言語を始めとする伝統文化、信仰もまた器の素材である。今、日本人の心のすさみが問われるに至ったその原因は過去六十年にわたって日本社会が「こころの器」を軽んじ、しばしば否定してきたことの報いであり、形を捨て去った天罰だと思う。こころを育むためにはまず容を正すことから始めなければならない。「早寝、早起き、朝ごはん」も良い。学校においても、家庭においても、職場においても時に触れて国旗を掲揚し、国歌を歌うことから始めるべきだ。

金澤 一郎



人間は、他人の存在を意識しながら尊重するとともに、それを自分の存在や欲求とうまく折り合いをつけることができる稀有な生物であると思います。ですから、人間の価値は、いかに適切に自分の欲求を抑制することができるかどうかにかかっていると思います。この脳での抑制過程は、一朝一夕にできるものではなく、幼少時から事あるたびに、他人(親、先生、友人など)から適切に教わってこそ正しくできるものです。これは「幼少時」であることが重要で、大人になってからではすでに遅いのです。また、この抑制(躰と言ひ換えてもよいでしょう)を身につけさせる過程では、子ども達の心に、自分を抑制するというマイナスの思いだけでなく、そうすることによって他人から信頼されるというプラスの思いをセットで与えたいと思います。その意味で、私を含めて、親、先生、先輩たちの責任は極めて重いといえましょう。私は、日本の子ども達の無垢の能力を信じます。

佐々木 毅



「こころを育む」のは結局のところ自分自身である。そのためには先ず自分が自分を大切にすることがなければならない。それは他人との出会いの中で育まれる。他人との出会いは自分を外から見つめる上で欠かせない過程である。自分を内からだけではなく、外から見つめることによって初めて自分を大切にすることの意味が分かってくる。本当に自分を大切にすることが出てくれば無茶なことはできなくなり、勉強することを含め、努力が身についたものとなる。周囲の人間にできることは自分が自分を大切にすることを育むバランスのよい環境を作ることに尽きる。これは難しいことであるが、家庭や学校という場からワーク・ライフ・バランスまで、やるべきことは山積している。これまで随所で試みられてきた貴重な体験と工夫を再発見し、互いにネットワークを作って結びつけ、一歩でも二歩でも、こうした環境を作るために力を合わせるようにしていきたい。

滝鼻 卓雄



「早寝、早起き、朝ご飯」という言い慣わしがある。当たり前のことだったが、いまでは死語に近いと言う人がいる。

そうだろうか。健康的な家族、結束の強い家族、何でも言い合える家族、いつも集まることのできる場所を持っている家族。そういう家族は「早寝、早起き、朝ご飯」を実行し得る家族だろう。もちろん親の転勤、共働き、子供の進学、家族の病など、「早・早・ご飯」を実現できない事情も多々ある。

それでも、家族の絆を強めるため、「早・早・ご飯」を実現しようと努力するのとはしないのではその違いはあまりにも大きい。

二年近く、私は「こころを育む総合フォーラム」に参加し、各界の方々のお話を聞いてきた。そして、いまこの国で起きている軽混乱軋の根底にあるものは、家族の絆の喪失ではないかと、確信に近いものを感じとった。

この問題は公的機関によって構成された会合では、結論の出しにくいテーマである。民間人だけが集まった「フォーラム」であるからこそ、深く議論ができたと思う。

張 富士夫



私は「もっと人の良い点を見るようにしよう」「そしてほめる習慣を世の中に根づかせよう」と言いたい。日本は決してダメな国でもないし将来が暗い国でもない。それどころか世界一安全な国で外国から羨しがられている。ところが悪い点ばかりがニュースになって、もうこの国は将来がない、大変な世の中になってしまったなどと思う人がかなりいる。

しかし悪いニュースの何十倍もすばらしい現実がある。ただ皆それを知らないか、見過ごしているだけだと思う。だから家庭でも学校でも地域でも、もっと良いことを認め、ほめないといけない。

人の心もやさしさから意地悪さの間でゆれ動く。組織体も良いこともやれば失敗もする。良いことをやった時、他から認められ、ほめられ手本にされると、人は皆やる気を起こしさらに頑張るものである。

教育については特に「ここにこんなすばらしい学校がありますよ」「先生たちがこんなに努力して成果を上げてますよ」「子供たちがこんな立派なことをやってくれました」など良い点を取り上げて皆に紹介し、ほめて広めることが大切である。

今はクリスマスシーズン。今頃アメリカの各都市ではクリスマスディナーのバンケットが盛大に開かれ、席上今年一年恵まれない人々に一所懸命つくした名も無い人が表彰され皆の祝福をうけていることだろう。

遠山 敦子



このフォーラムを立ち上げて二年、メンバーの皆さんの絶大なご協力を得て今回の提言となった。これを契機に大人も子どもも、せめて「自分が人からされて嫌なことを人にしない」ことだけでも守るようになりたい。

その上で子どもたちに、生きるための支えとなる糧を家庭で何か一つしっかりと身につけてやれないものか。例えば挨拶、親切、思いやり、読書、自立、努力、勇気、学ぶこと、考えること、世に尽くすこと、志を高くもつことなど心の作法といったものであれば何でもよい。子どもの心にその一粒の実を与えられれば、親のなすべき使命はおおむね達成したといえる。子はその実を自ら育てて、人生の花を咲かせていくことができるからだ。

もう一つ都市化とIT機器万能の今の時代にこそ、心を養うためにどうしても取り入れたいのが自然とのかかわりだ。自然の持つ美しさ、厳しさ、そこに生きる生命の多様さと不思議さに触れることで、人は無量の英知と感性を学びとる。他者とともに味わう自然体験は必ずや人生に潤いを与え、生命を大切にす心情につながる。しかも育むべき日本のこころの源泉が、そこにある。

永井 多恵子



子供たちを支えることの出来るのはやはり、「家庭」です。いいことをしたとき、おもしろいことをしたとき、誇らしく思ってください、共におもしろがってください。

「きれいね、カッコいいね」と時折、容姿についても褒めてください。

自己肯定感をもつことは生きることの力につながります。そして、「自分が大事」と思うと同様、他人も自分が大切なのだということも知らせましょう。だからこそ、人の命を損なってははいけないし、他人のものを盗んではいけないのです。

緑あふれる国土に育つ私たちは森の向こうに大きな力をみてきました。そして足るを知る人々だった筈です。しかし、現代は欲望再生産社会、大人でさえ欲望をコントロールするのは難しい。ましてや子供は過ちを犯しやすいものです。そんな折には冷静にしかし厳しく叱り、社会のルールの意味合いを教えてください。天知る、地知る、われ知る、人知る、という古いことばもあります。遥か森の彼方から見ている人の存在も教えてください。

地域社会は核家庭を包む緩衝帯(バッファー)です。地域をみつめているおじさん、お婆さんのお節介も再評価してはどうでしょうか。

中村 邦夫



二年間の討議の過程は、私自身、大変勉強させていただき、また、考えさせられる機会となりました。何よりも「こころを育む」ということが極めて重く深いテーマであることを改めて感じました。しかも、二年前にフォーラムがスタートした時にもまして今は、残忍な事件、いじめ、虐待、さまざまな不祥事など、日本人の心の荒廃を感じざるを得ない出来事が連日のように報じられています。私たちに、何かできることはないのだろうかという焦りすら感じる昨今です。

それぞれの分野で最高権威の先生方を中心に真剣な議論を経て結晶された提言は、「家庭」「学校」「地域」「企業」という、いずれも私たちの誰もが関わる場で一人ひとり行動を促すものです。より多くの人びとがこの提言を目にし、それぞれの立場で自らのこととして具体的に実践していただきたいと思います。

企業に集う一人ひとは同時に生活者です。働くことで社会に貢献するとともに生活者として、健全な家庭づくり、より良き社会づくりに貢献していくという視点、行動が「こころを育む」鍵を握ると考えています。そのために、企業としては、「働くこと」と「生活すること」のバランスがとれるような仕組みづくりに挑戦し続けてまいります。さらに、本業で貢献することに加えて、「企業市民」として、「企業の良心」の発露の仕方を考え、具体的な企業行動につなげてまいります。

この種の提言は、ややもすると一過性のものに終わってしまいがちです。運動として、繰り返し、さまざまな場面で発信と実践が継続される必要があります。私も、企業人また一個人として、提言内容にしたがって、できることからぜひとも実践していく決意を強くしております。

中村 桂子



こころを育むという議論に参加しながら考え続けていたのは、私たちはなぜこれほど生きにくい社会を作ってしまったのだろうということでした。提言は、皆が自信を持って生き生き暮らすための具体案であり、そこから鍵となる言葉を拾うと、手塩にかける、関わりを大切にする、場を開いていく、思いどおりにならないこともあると認めるなどが浮かび上がります。

実は、これはすべて生きものの特徴です。現代は物質の豊かさに眼を向け過ぎたと言われますが、問題は豊かさではなく、そのために機械偏重の便利さだけを求めたことにあると思います。これが、先にあげた生きものらしさを消しました。人間が生きものであることを再認識し、他の生きものたちにも眼を向け、生きていることを実感する生活のある社会でありたいと思っています。たとえば食べもの。農業、食品づくり、お料理、食べ方…これらに気を配ると自ずと心が育まれると思います。軽生きている軫を見つめている人はしっかり地に足をつけて生きている。これが体験から得た実感です。

野依 良治



美しい自然と四季に恵まれた日本に生まれ育ったことを本当に幸せに思います。そして長年にわたって培われてきた文化は、私たちの誇りであり心の拠りどころです。

幼少期には祖父母や父母たちから衣食住にかかわるさまざまな事柄と命の尊さ、さらに公德心や礼節も習いました。学校や地域社会からは、友人たちとのかかわりの中で多くを学び、生きる術を身につけました。そして、どの国の人たちよりも勤勉に働いて、先人が築いた礎の上に豊かな文明社会をつくってきました。良き伝統とは継続に宿る本質です。日本人がもち続けてきた「かけがえのない」価値を、ぜひ若い世代に伝えたいと思います。加えて、時代に応じた革新も必要です。たとえ、明日に如何なる世界が開けようとも、常に健やかなこころを育み、真なる自然観と人生観をもって生きなければなりません。

一人ひとりがそれぞれに精いっぱい努力して知性と感性そして技を磨き、自立した人生を送って欲しいと願いますが、人は皆、立場が違う多くの人びとの理解と協力なしには生きて行けません。国もまったく同様です。四方を海に囲まれた日本は、世界に開かれた国です。新しい世紀にふさわしい視野をもち、他の国々と手を携え広く人類社会に貢献する国をつくろうではありませんか。

本田 和子



赤ちゃんが笑います。抱き上げ、向き合って見つめ合うとき、わたしたちも思わず笑ってしまいます。人と人は、向き合い目と目を見交わし、笑い合うことで、ともに生きる喜びを分かち合うことができます。

手を繋ぐと、わたしの手に温かさが伝わってきます。きっと、相手の手も温かさを感じている筈。機械にはない感触です。手を繋ぎ合うことは、人が一人ではないことを肌身を通じて実感させてくれるのです。

わたしたちの肉声を、ただし、優しく温かい声を交わし合って、お互いの言葉を共有しましょう。生まれたての赤ちゃんも、身近な人の肉声には、積極的に反応し脳を活発に働かせるとか……。語り合うことは、人間が生み出した知恵の結晶です。人と人を、より深くより確かに理解させ結び付けさせてくれるでしょう。

子どもも大人も、この国の人もよその国の人も、ともに笑い合い触れ合い語り合うとき、そこに仲間が生まれます。仲間たちと励まし合い慰め合いつつ、この難しい時代を、ともに乗り越えて生きたいものです。

三村 明夫



今回の議論を通じて改めて痛感したことは、現在子どもたちが抱える問題の多くは、大人の問題そのものだ、ということです。よって、問題解決には、社会のすべての人々が、自らの課題として真摯に取り組むことが不可欠です。そうしたなか、我々企業として、子どもたちのこころを育み、こころを育むことができる大人を育成するために、どのような役割を果たすことができるのでしょうか。私は、「今すぐできること」からはじめるため、次の二点に取り組みたいと考えています。

第一は、社員の教育を再度強化することです。バブル崩壊後、日本企業の多くは、生き残りをかけ、血のにじむようなリストラに取り組んできました。しかしその過程で、本来、十分に資源を投入すべきところにも手をつけざるを得なかったことも事実であり、その一つが社員教育だと思います。すでに当社では、6S(整理、整頓、清潔、清掃、作法、しつけ)の徹底等の基本的なルールの遵守、円滑な世代交代のための人材育成等、本来あるべき姿を取り戻す様々な取り組みを強化しているところではあります。

第二は、企業の持つインフラや社員を活用し、地域社会の子供との「交流」を一層活発化することです。具体的には、すでに行っている地域の小学生や先生の製鉄所見学をさらに拡大し、「ものづくり」の大切さを一人でも多くの皆さんに感じていただきたいと思っています。

これらの取り組みを通じて、当社の企業理念である「社会と共生し、社会から信頼される」企業として、子供たちが真に日本の将来に希望を持てるような社会の実現に少しでも貢献できればと考えています。

山折 哲雄



まだ若かった貧乏時代のことだ。心がささくれ立っているようなとき、よく一人で散歩に出た。一時間でも二時間でも歩きに歩いた。そのうち胸中の鬱屈が晴れていく。ぶつけようのない怒りがおさまり、はてしない悲しみの海からはい上がることができた。涙が流れ、そして乾いていく。一種の爽快感を味わうことができた。それはたった一人で、黙々と歩いていたからだったと思う。

群れからの脱出、である。仕事仲間や付き合い仲間からの逃走である。自分一個をこの広い天地の片隅に追いやる遊びである。オレは一人だと雄叫びをあげ、オレは一人だとわめき散らして歩きに歩く。すると不思議なことに道端に咲く草花が、こちら側の緊張しきった顔にいつのまにか微笑みかけてくる。空飛ぶ小鳥たちのさえずりが、硬直したからだに甘露のように降りそそいでくる。

私は今でも一人で歩く。

鷺田 清一



幼い頃、母親が長く病の床に伏せていたので、よく近所の商店街に買い物にやらされました。ビニールの買い物籠をもって、お肉屋さんでコロッケを買いに行くのがいやでした。揚がるのを待つあいだ、同級生に見つかるのがいやだったからです。八百屋さんや傘屋さんのおばさんに「えらいねえ」と声をかけられるのもいやでした。そっとしておいてほしかったからです。だからいつも一目散で帰りました。

子どものときは、あの商店街のおじさん・おばさんたちの視線がいやでいやでしょうがありませんでした。でも、いまになって思います。買い物籠をもって走るわたしの姿をちゃんと見ている近所の大人たちの視線に、見守られ、そして鍛えられたのだ、と。

よその子どもたちを見て見ぬふりをする大人たちが、かつての地域にはたくさんいました。いまは、ちゃんと見ないで、見たようなことを言うひが多すぎます。大人に監視されるのではなく、見て見ぬふりをする大人にまじって自然に育つ、そんな環境が、いまの子どもには必要だと思います。

フォーラムの

設立から提言まで

フォーラムの設立から提言まで

1. フォーラムの設立とその趣旨

現代社会における「こころを育む」環境づくりにとり組むため、広く意味ある提言を行っていききたいという趣旨で、平成17年4月18日に本フォーラムが設立されました。このフォーラムを契機として、家庭、学校、地域社会、企業、NPOなどが連携して、「こころを育む」という目的に向かっての国民運動として広がりを見せるということが、当初から私たちが抱いていた大きな期待でした。

経済界、学界をはじめ、民間における英知を結集するために、遠山敦子松下教育研究財団理事長（元文部科学大臣）の呼びかけにより、各方面からのメンバーに参加を求めました。16名のメンバーは、原則として月に1度早朝に開かれるブレックファスト・ミーティングに集い、討議を続けていくこととしました。

2. 会議における討議経過

フォーラムにおいて開催された会議は、メンバー全員が参加する会議であり、まずメンバーによる基調報告を7回にわたって計14人が行い、続いて各分野の第一線で活躍されている研究者や実践者による活動報告を3回にわたって計6人が行い、最後に討議のまとめとして8回の会議を行いました。平成17年4月から平成18年12月まで、18回にわたって討議をすすめてまいりました。

●第1回会議

発起人である遠山敦子氏から、あいさつと趣旨の説明があり、座長を務める宗教学者の山折哲雄・国際文化研究センター所長が、「日本人が『心は大切』と言い続けて千年が過ぎた。その間、何人もの優れた宗教家などが、日本人の心の探究を深めてきた歴史がある。今後、こころを育む環境づくりをどう進めたらいいのか、みなさまのお知恵を拝借したい」と呼びかけました。このあと、メンバーからそれぞれの意見が交わされ、家庭、学校、地域、ジャーナリズム、出版物、コミュニケーション環境など、人間のこころや生き方に影響を与える社会的要因について、さまざまな考えが出されました。

●第2回会議

メンバーの鷺田清一・大阪大学副学長（倫理学・哲学）と葛西敬之・JR東海会長がそれぞれ、「食と心」「JR東海の社員教育」をテーマに基調報告を行いました。鷺田氏は、「そろって食卓を囲むということの教育的な意味」として、他者への想像力、相互の信頼、幸・不幸の感覚の3つをあげ、その重要性を強調するとともに、現在の日本でそれらが失われつつあることを指摘しました。葛西氏は、中堅のアドバイザーやインストラクターが新入社員の仕事、マナー、悩みなどについて指導や相談を行うJR東海の教育システムを紹介し、「こころのよりどころ」としての企業の役割を論じました。家庭と企業という両面における教育という話題に端を発し、その後の自由討議では、「教育とはだれがどう担うのか」について多岐にわたる意見が出されました。

●第3回会議

会議ではしばらく、基礎科学や哲学の視点からこころの教育について考えていくこととし、今回は、メンバーの安西祐一郎・慶応義塾塾長（工学・認知科学）と本田和子・お茶の水女子大学名誉教授（児童学・児童文化論）が基調報告を行いました。安西氏は、「どんなこころを育むのか」という演題で、「独立して生きるこころ」と「協力し合って生きるこころ」の2つをとりあげ、自分の能力を見つけ出して、それを育て人のために活かすという機会の大切さを訴えました。本田氏は、「現代の子ども問題」というテーマで、家庭や地域が弱体化して学校教育が肥大化しすぎていること、子どもが消費者あるいは投資の対象になっていること、愛する対象としてというより操作可能な対象として子どもが見られてしまう傾向などを指摘しました。討議では、子ども時代の体験や感動というテーマを中心に、

バーチャル体験や「遊び」の機能についても話が及びました。

●第4回会議

メンバーの中村桂子・JT生命誌研究館館長(生命科学)と佐々木毅・学習院大学名誉教授(政治学)の2名が基調報告を行いました。中村氏は、「1個の細胞から生命がはじまり、すべての生き物たちがつながっていること」「1個の細胞から個体が生まれ育っていくこと」から、子どもを愛し、育てるプロセスを楽しんでほしいと主張しました。佐々木氏は、「公共性との出会い」をテーマに、「滅私奉公」に隠れていた「私」を表に出すと同時に、「公」の中で異質性と出会い、協力、連携、社会的参加などを通して、人間としての新たな可能性を開くプロセスの重要性が指摘されました。個と社会との関係という基本的なテーマをめぐって、「人間の欲望とその抑制」、「利便さを追求する社会」などの問題が討議され、子どもにどう考えさせていくかが話し合われました。

●第5回会議

まず、遠山敦子氏から、これまでの議論を前提として総括的なまとめがありました。育むべきところを考える際の問題を、個人、家庭、学校、社会、一般という領域に分け、それぞれにつき、「社会情勢の変化」「そこから生じるところの問題」「解決に向けての提案」という側面から、これまで提出された意見、主張が整理されました。戦後60年の日本の社会の大きな変化として、急激な都市化、核家族化、消費社会化、目標の喪失、高度情報化の5つをあげ、その中で、自立して生きる人間力、他者との協生、公共への参加を育むべきことが述べられました。金澤一郎・国立精神・神経センター総長(脳科学)は、「子どものころを上手に育む3か条」として、「人を信用し、安心するという経験を与えること」「ほめること、叱ることを通して自己抑制の力をつけること」「実体験、コミュニケーション、文芸作品などによる経験を豊かにすること」をあげました。討議では、これまでの議論を補充するとともに、どのようなメッセージを出し、実行に移していくかが議論されました。

●第6回会議

今回は、マスコミ、メディアからの提言ということで、滝鼻卓雄・読売新聞東京本社社長と永井多恵子・NHK副会長の基調報告がありました。滝鼻氏からは、「活字と教育」をテーマに、活字離れが進んでいる一方で、メディア教育や読書への関心が高まっており、新聞活用教育(Newspaper in Education, NIE)、朝の読書運動などが盛んになっている様子が報告されました。永井氏は、学ぶということが身体性を失いつつある現状を指摘し、表現教育にところを育てる可能性があることを主張しました。また、その延長に、美しい表現として「社会的マナー」を考えることができるのではないかと提案しました。自由討議では、テレビやインターネットの功罪、マスコミの報道や企業広告の責任、子どもの表現力の低下などについて、多くの意見が提出されました。

●第7回会議

企業内での人材育成というテーマで、張富士夫・トヨタ自動車副会長(現会長)と中村邦夫・松下電器産業社長(現会長)から基調報告がありました。張氏は、トヨタの評価する人材像として、「現状に満足せずに自分を成長させることに意欲をもっていること」、「相手の価値観を尊重でき、チームで仕事をするのに抵抗感のないこと」をあげ、家庭や学校でも、自己決定、自己責任、他者への尊敬などを育ててほしいと述べました。中村氏は、「企業というのは社会からの預かり物であり、時代に応じてたゆまぬイノベーションを行う」という松下幸之助の理念と、当社では全員経営、実力主義、人間尊重を人事の基本として教育や人事を行っている旨が紹介されました。その後、企業での倫理、価値観、競争意識などについて討議がなされました。

さらに、第8回から第10回の会議では、それぞれ、家庭、学校、地域での教育について、専門家を2人ずつゲストスピーカーとしてお招きし、基調報告と討議を行ってきました。

●第8回会議

菅原ますみ・お茶の水女子大学助教授(発達心理学)と信田さよ子・原宿カウンセリングセンター所長をゲストスピーカーとしてお招きしました。菅原氏は、母親が子どもに対して持っている否定的感情が、子どもの衝動的な問題行動の原因となり、またそれが母親の抱く否定的感情を増幅して悪循環になることが示され、それを防止するには、父親の養育態度と、夫婦関係のよさが重要な要因であると述べられました。信田氏は、児童虐待や妻への暴力といった家庭内暴力をテーマに、その現状を紹介し、いまや「親は子どもをかわいがるものだ」という前提でなく、結婚するとき、親に「子育て講座」などを実施するという提案も出されました。討議では、子育てに関する親の意識の変化、日本と諸外国の子育ての違い、家庭や地域の教育力の減退などについて意見が交換されました。

●第9回会議

学校において、こころをどう育むかということテーマに、西野真由美・国立教育政策研究所センター総括研究官と、福島博子・さいたま市立内谷中学校教諭から基調報告をいただきました。西野氏は、道徳教育がなかなかうまくいっていない現状を話されました。道徳教育とは、他者、自然、社会との関わりに関することを学ばせるものだが、現代においては、それを作り出すことがそもそも難しいことが指摘されました。福島氏は、「孤から個へ、そして成熟した個へ」という基本的な考え方で道徳の授業を実践していることを話されました。最近では「命」をテーマに道徳教育をすすめており、基本的な生活習慣や思いやりについて考えることにつなげたいということでした。自由討議では、道徳教育の内容、文部科学省作成の『こころのノート』の使われ方、「国を愛するこころ」の育て方、学習への動機づけなど、多様な意見が出されました。

●第10回会議

地域教育をテーマに、市川伸一・東京大学大学院教育学研究科教授(教育心理学)と、相川良子・渋谷区青少年教育コーディネーターをお呼びしました。市川氏は、地域教育の意義を、「学校では学びにくい内容が学べる」「多様な年代の人たちとの関わりができる」「子どもが地域社会に関心をもつようになる」という三点をあげ、大人の社会生活を見据えた「人間力」の育成には、地域教育の活性化を図るしくみが必要であると論じました。相川氏は、渋谷区における子どもや若者の居場所として、「ファンイン」を設立したことを話されました。今後は、その中で若者たちが自分の役割を認識し、自分は役に立てるという自己肯定感をもって、社会での生き方につなげていこうという意識をもってほしいと述べられました。地域の教育力が昔とどう変わったか、都市部と過疎地ではどう違うか、地域教育に何が期待できるか、など活発な討論が行われました。

続いて、第11回から第13回では、これまでの議論を整理した資料をもとに、提言をどのようにまとめていくかについて話し合われました。

●第11回会議

どのような問題を重点的にとりあげるかについて、さまざまな意見が出されました。話題は非常に多岐にわたりましたが、その中でも、「現在の道徳教育がうまく機能していないことから、公共性、市民性、市民倫理、心の作法など、新しいキーワードをもとに考えていってはどうか」「行政ではなく、民間の立場からの運動として展開するには、家庭・家族の問題を中心においてはどうか」「日本人に失われつつある心の問題として、帰属意識の欠如や縦の人間関係の減少があるのではないか」といったテーマに意見が多く寄せられました。

●第12回会議

前回に引き続き、提言のまとめとしてどのような論点に重点を置くかについて話し合われました。まず、謙虚さ、思いやり、清貧、といった日本人の大切にしてきた伝統的価値観が、とくに「勝ち組」

と言われるような人たちに欠けてきたのではないかということが話題になりました。そこから、さらに、個人の自由と公益を結びつけて考えること、人間が環境の中で「わきまえて生きる」ことが大切ではないかという議論がなされました。ただし、提言としては、「前向きな提案をしたいこと」、「……すべし(must)」という論調ではなく、ともに……していこう(Let's)という提案にしたいこと、「人間同士の信頼感を基礎におきたいこと」などが意見として提出されました。

●第13回会議

山折座長の起草した提言の序論について、意見交換が行われました。全体的な論調、文章表現については共感、賛同が得られましたが、「社会の影の部分だけではなく、光の部分と対比させながら表現してはどうか」「科学技術を光として求めてきたことに基本的な問題はなかったか」という議論がなされました。また、「殺すなかれ、偽るなかれ、盗むなかれ」という黄金律をどう位置づけるか、「美意識、自然観、死生観」という感性的なものに加えて、社会性を育てることを強調するべきではないか、という議論にすすみました。後半は、今後、家庭、学校、地域、企業、社会などに対して領域ごとの提言をつくるにあたって、まとめの資料を参考に、強調点や補足事項を出し合いました。

3. シンポジウムの開催

フォーラムでは、上記の討議に加え、広く一般の方々への問いかけのため、シンポジウムを2回開催して来ました。いずれも山折哲雄座長による講演と、有識者メンバー数名によるパネルディスカッションから成るシンポジウムでした。

第1回は、フォーラムの前半の討議をベースに、京都において平成17年10月7日、テーマは「21世紀の日本人の育むべき『ころ』とは」でした。参加者は1200名にのぼりました。

第2回は、フォーラムの後半の討議をベースに、東京において平成18年10月21日、テーマは「『ひとを育む』—今、大切なこと—」でした。参加者は500名に絞って行われました。

このシンポジウムの様子は、読売新聞において詳しく報道され、フォーラムのホームページにも掲載されています。

4. 提言書の作成と公表

フォーラムとしての提言をとりまとめるために、準備作業としてメンバー10名による「起草委員会」を立ち上げました。平成18年5月から8月まで4回にわたる会合を開き、それまでのフォーラムの全体会議やシンポジウムの内容を前提として、家庭環境、学校教育、地域教育、社会や企業の役割といった視点から、さらに討議を重ねた上で、どのような提言をしていったらよいかをまとめていきました。

●第14回会議

最終討議として平成18年12月1日に開かれ、メンバーの鷲田清一氏が起草委員会での議論を踏まえて作成した提言の文案をもとに、活発な意見交換が行われました。また、報告書全体の構成と執筆の分担についても確認しあい、年内に原稿を完成させ、年明けには社会に向けて発信していくという運びとなりました。

読者の皆様へのお願い

このフォーラムからの提言を契機として「こころを育む」国民運動にご参加いただきたいと、心からお願いいたしております。読者の皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。また、同様の趣旨で既に活動されている場合、活動内容をご紹介いただければと存じます。
こころを育む総合フォーラムホームページ<http://www.kokoro-forum.jp/>

こころを育む総合フォーラムからの提言

発行日 平成19年1月31日
発行者 こころを育む総合フォーラム
編集・製作 こころを育む総合フォーラム事務局

〒105—0001
東京都港区虎ノ門1—1—10
第二ローレルビル6階
財団法人 松下教育研究財団内
電話 03—5521—6100
印刷・製本 日本印刷株式会社

本書の無断複製転載を禁じます